
チップは恋

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

チップは恋

【Nコード】

N1935E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

廉が学校の休み時間にポーカーをしているとそこにクラスメイトの麻里が来て急に。いきなりはじまるラブストーリー。

第一章

チップは恋

休み時間に暇なのでポーカーをしていた。これはよくある風景で別に驚くものでも何でもなかった。

しかしそれが一変したのは彼女が来たからだ。

「ちよつといいかしら」

「んっ！？何だよ」

荒木廉は同じクラスの多村麻里が来たのを見て顔を上げた。

彼女は黒い髪を肩のところまで切り揃えた少し顔の丸い女の子だ。

目鼻立ちはしっかりとした感じであり整っているが気の強そうな印象を与える感じだ。胸は大きくはないがスタイルは整っている。そんな女の子だ。廉といえば黒髪の横の部分の部分を短くして上だけ伸ばしている。細い目に結構骨ばった感じの顔だ。しかしそれが精悍でもあった。

「宿題ならさつき見せたよな」

「またそれとは違う用事よ」

こう彼に言うのだった。そうしてクラスメイトとポーカーの勝負を終えたばかりの彼の側にやって来てまた言うのだった。

「丁度勝負も終わったしいいタイミングね」

「タイミング！？」

彼はそれを聞いて声の調子をあげた。

「何だよ、それって」

「だから。ポーカーよ」

麻里は言う。そのきつい顔が少しだけ綻んだ。

「ちよつと勝負したいんだけど」

「俺と？」

「ええ、そうよ」

こう廉に対して言うのだった。

「少しいい？」

「ああ、別にいいけれどよ」

彼としても異存はない。今丁度終わったところでタイミングもよかった。しかしどうも釈然としないものもまた感じていた。それは予感めいたものであった。

「何でまた急に」

「ポーカーをするのに理由があるのかしら」

「そう言われるとな」

少なくとも今は暇潰しの遊びだ。理由を言われると返答に困る。

「ないよな、やっぱり」

「そういうことよ。ただね」

ここで麻里は言うのだった。

「賭けるものはあるわ」

「お金かい？それとも食い物かい？」

学生なのであまり大したものを賭けることはできない。しかしポーカーもギャンブルである以上賭けることがあるのは常識だった。

しかし問題はそれが何かなのだ。

「食い物だったらいいいけれどな」

「残念だけれどどちらでもないわ」

しかし麻里の返事はそのどちらも否定するものであった。

「じゃあ何だよ。何かくれるのかよ」

「ええ、そうなるわね」

麻里の今度の返事はこれまた廉にとっては訳のわからないものであった。

「そうなる？」

「そうよ。それでいいかしら」

「いいけれどよ。御前が何かくれるのなら」

廉は応えながら述べた。

「俺も何か賭けるか」

「あんたは何を賭けるの？」

「そうだな」

少し考えてから答えるのであった。口元に右手を当てて考えそれから述べる。

「御前が何を言いたいのか知りたくなつたな」

「！？それでいいの？」

何故かその言葉を聞いて急に思わせぶりな笑みになる麻里であった。

「それだと勝つても負けても私が得するけれど」

「得！？」

またしても廉にとってはわからない言葉だった。怪訝な顔になり顔も顰めさせるのだった。

「何だよ、得つて」

「話はすぐにわかるわ。それでいいのよね」

「ああ」

念を押してきた麻里に頷いて答える。

第二章

「俺としては今のところこれといって賭けるものもないしな」

「それじゃあこれで決まりね。じゃあ」

「ああ、やるか」

こうして賭けがはじまった。二人は席に着いて居合わせたクラスメイトからそれぞれ五枚のカードを受け取った。まずは廉の番であった。

「何枚かしら」

「二枚だ」

彼は麻里に答えた。

「それじゃあな」

「ええ、どうぞ」

こうしてカードの交換になる。廉はその言葉通り二枚のカードを交換した。今度は麻里の番で彼女は一枚であった。交換したカードを受け取っても表情は変えない。

そのまま暫くカードを交換し合った。三回程であった。その最後の交換が終わったところで麻里が言ってきた。

「ストップ」

「これでいいのか」

「ええ。これでね」

「わかった。俺もそれでいい」

廉も頷いた。これで決まりだった。

二人はそれぞれカードを出す。麻里はフォーカード、廉はフルハウズだった。廉の勝ちだった。

「俺の勝ちだな」

「そうね」

麻里はにこやかに廉の言葉に頷くのだった。賭けをしているのにどういいうわけか負けても平気な顔だ。しかも彼女は負けず嫌いだと

いうのに。これが廉には引っ掛かった。

「じゃあいいな」

話を賭けに移してきた。

「それで。御前は何を考えているんだ？」

「それを知りたいのね」

「ああ。そもそも」

彼は言う。腕も足を組んで麻里を見据えながら。

「どうして急にポーカーをしようなんて言うんだ」

「それはね。言いたいことがあるからよ」

「言いたいこと？」

「最初は私が勝ってから言うつもりだったんだけどね」

こう廉に述べる。

「けれど勝っても負けてもなくなったから別によかったわ」

「よかった」

廉はそれを聞いてもやはり今一つわからなかった。

「何なんだよ、そもそも御前」

「言うわ」

麻里はまた廉に言ってきた。

「私はね。あんたに言いたいことがあるのよ」

「俺にか。何なんだ？」

「付き合ってもらえるかしら」

「こう言うのだった。」

「私とね。いいかしら」

「！？それって」

廉は話を聞いて怪訝な顔になった。どうも話が掴めない。

「あれか！？つまり」

「そうよ、あれよ」

麻里の顔が少し赤くなった。それまでのポーカーフェイスのままだが顔の色だけが少しだけ変わったのだった。そこに表情が見えた。「告白なのよ。わかるわね」

「御前、そうだったのか」

廉の目が動いた。しばたかせている。

「俺に告白する為にこうして」

「そうだったのよ。わかったわよね」

「ああ」

彼女の言葉に頷く。

「そういうことだったのか。それでここに」

「返事はどうなの？」

麻里は単刀直入に問うてきた。

「それを聞きたいのだけれど」

「俺も今はフリーだけれどな」

相手がいないのだ。それは正直に言う。

「じゃあいいわね」

「断ることは許さないだろ」

「今周り見ればわかるわ」

クラスのと真ん中だ。当然ながらクラスメイトも大勢いる。これで断るというのもそうそうできはしない。つまりこれも麻里の計算だったのだ。

第三章

「さあ、どうするの？」

「断ることはできないんだな」

「そういうこと。私も必死なのよ」

顔がさらに赤くなる。もう真つ赤に近い。

「恥ずかしいんだから。わかるわよね」

「わかったよ。俺も恥ずかしいけれどな」

そうは言つが表情も顔色も変わらない。姿勢もだ。

「いきなりこんな言われてな」

「で、どうするの？」

また廉に問うてきた。

「返事を聞きたいのだけれど」

「わかったさ」

まず言葉のワンクッションを置いた。

「言つな。それでいいな」

「ええ。それで返事は？」

麻里の喉がゴクリと鳴つたのが見えて聞こえた。

「今すぐ聞きたいのだけれど」

「今すぐにか」

「そうよ。どうなの？」

あらためて彼に問う。

「どうなのかしら」

「断ることは許さないんだよな」

廉は言った。

「だったらさ。それでいいさ」

「いいの」

「だから。断ることは許さないんだろ」

そこをまた言う。そもそも断れないような状況の中で話を出して

きているのだから確信犯である。それを言ってももう遅いのであるが。

「それに俺もな」

「あんたも？」

「人のその言葉を拒んだりはしないさ」

「言ったわね」

麻里もそれを聞いて不敵な笑みになった。赤い顔が消えてしまっていた。

「また随分と余裕ね」

「余裕も何も俺のことが好きなんだろ」

「うっ……」

それを聞いて今度は言葉を詰まらせてきた。凶星だったようだ。

「ま、まあそれはね」

「そうなんだな。だったらいいさ」

「いいの」

「だから俺に言ってきたんだろ？」

そこをまた言う。言葉が完全に麻里に向けられていた。

「俺もだ」

「あんたもって」

今度は麻里が目を顰めさせる番だった。目も白黒させていた。

「何が何だかわからないんだけど」

「だから。あれだよ」

何と廉の顔が赤くなつた。微かにであるが。

「俺も御前のことがだな」

「そうだったの」

「だからだ。つまり」

「……わかつたわ」

そこまで聞いて今度はその白い顔を完全に紅にしてしまう麻里であつた。

「それじゃあ。御願いな」

チップは恋

「ああ、こちらこそな」

二人で言葉を交えさせるのだった。何だかんだではじまった恋。それはポーカールのチップからだった。こんな恋もあったりするのだ。

チップは恋 完

2008・2・28

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935e/>

チップは恋

2009年3月24日09時34分発行